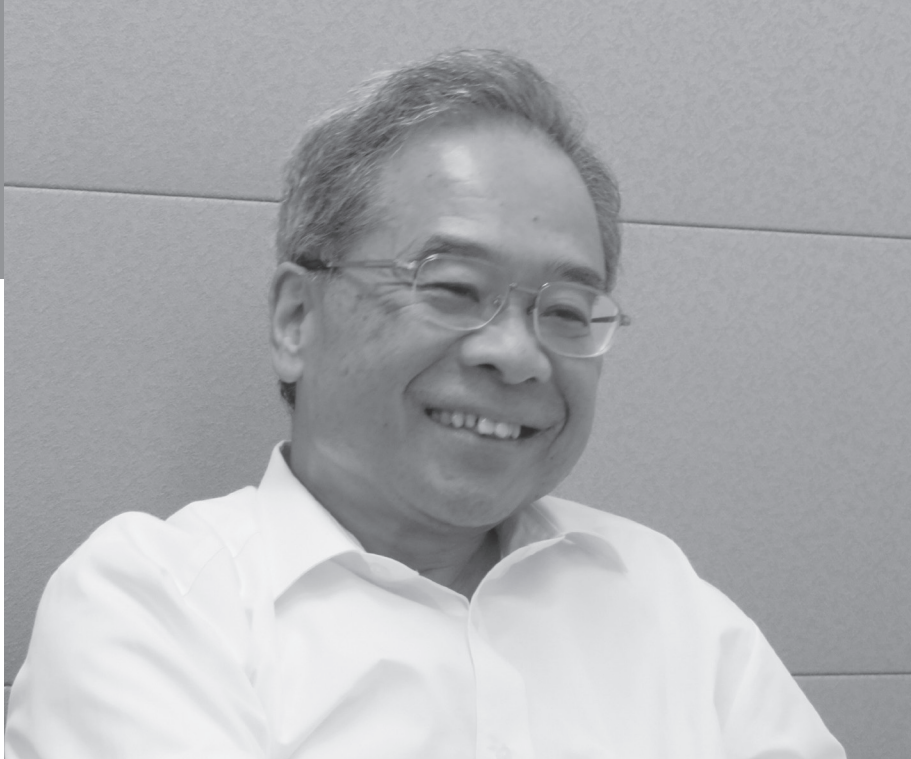


INTERVIEW

大阪府総務部 理事
笹井康典先生



求められるところで、 自分のやりがいを見つける

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

救命救急か、公衆衛生か……

山田隆司(聞き手) 今日は笹井康典先生のお話を伺います。笹井先生は自治医科大学の大阪府出身の1期生で、現在は地域医療振興協会近畿ブロックのブロック長を務めていただいています。

早速ですが、まずは先生のご経歴を教えてください、それから先生のお仕事について伺えればと思います。

笹井康典 1期生の私が卒業したころは、医師が足りない場所で働いてほしいという自治医大卒業生への期待はどの県も同じでした。ところが大阪府は全域が平野で交通の便もよく、山間・離島がないのです。それで選択肢は公衆衛生か救命救急センターのいずれかということでした。昭和50年ころから三次医療機関としての救命救急

センターの整備が、国や地方自治体で始まりました。大阪は千里に救命救急センターをつくりました。そのためそこで働く医者を確保する必要があったのです。ですから自治医大卒業生3人のうち1人は救命救急センターへ行って、残り2人は公衆衛生分野に進みました。その考え方は基本的には今でも変わりません。それで、私は公衆衛生に入りました。

山田 卒業してすぐに行かれたのはどこだったのですか。

笹井 府立の成人病センターの公衆衛生部門です。ほかの2人は府立病院へ行きました。

山田 先生は臨床研修はどうされたのですか。

笹井 4年目の1年間、病院へ行って研修しました。

それから吹田保健所、府庁の母子衛生係長、四條畷の保健所長に出て、そのあとはずっと大阪府庁の中です。

山田 卒業してすぐに成人病センターの公衆衛生部門へ行かれて、その3年間は何を担当したのですか。

笹井 1つはがん対策ですね。がん患者の登録をきちんとし、がんの罹患率の測定などをしていました。もう1つは循環器疾患対策です。当時は脳卒中の発症率が非常に高かったので、成人病センターの公衆衛生部門の大きな仕事でした。それから当時は保健所の母子保健の問題が大きかったですね。ですから保健所に出向いて母子保健、健診などの実務をしながら、公衆衛生の勉強をしていました。

山田 先生としては、臨床ではなく公衆衛生の道に入ることに抵抗はなかったのですか。

笹井 まあ、しかたがないし(笑)、切った張ったの世界は自分にはあまり向かないなと思っていたので、公衆衛生の医師が足りないならそこで頑張ってみようと言ったら、とても喜ばれました。

山田 ほかの2人は府立病院で臨床的な研修をした

わけで、その間、先生は成人病センターで3年間、公衆衛生の仕事をされたんですね。

笹井 成人病センターにいた間に、当時大阪大学公衆衛生学にいらっしゃった多田羅浩三先生と親しくなり、半年ほど一緒にイギリスに行き勉強させていただきました。

山田 イギリスのどこに行かれたのですか。

笹井 ケント大学です。そこには今でも日本でも流行りだした、ヘルス・サービス・リサーチの研究所があったのです。多田羅先生がそこへアプラインして、もう1人行けるといって行かせていただきました。NHSのヘルス・サービス・リサーチについて勉強させていただきました。

山田 それはいい機会でしたね。

笹井 イギリスでは、ヘルスビジターという、日本という保健師さん。それから日本にはないのですがディストリクトナースという、地域看護師。そしてGPと一緒に、アタッチメント・スキームの取り組み、プライマリ・ケアをはじめたのですね。しかも国営です。戦後のイギリスのNHSの体制はすごいなあと思いました。当時日本には介護保険もありませんでしたから。

山田 本当にそうですね。

行政の実務に携わって

笹井 その後、4年目に大阪府立羽曳野病院で少し臨床を学びました。

山田 義務年限で、最初の3年の後は自由選択だったのですか。

笹井 そうです。羽曳野病院は結核病院だったのですが、その小児科へ行き結核やアレルギーを1年間勉強しました。そして5年目から吹田保健所の保健予防課長に就きました。

山田 保健予防課長として実務に携わったのですか。

笹井 実務です。当時、老人保健法がつくられて、府の保健所と市町村、医師会が協力して、市町村の老人保健事業のいろいろな対策が進むような計画をつくりましょうということで、国全体の国民健康づくり計画モデル事業として取り組んだのですが、それを担当することになり、これが非常に面白かったですね。

山田 行政の仕事ですね。

笹井 吹田市も摂津市も両医師会も初めての経験で